

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

(1) 視点にかかわる幼児の育ち

○ 視点①「はつらつ」にかかわる育ち

- ・ エピソード『僕もしていい?』、『竹馬コースでの姿』で見られた姿は、「なりきること」や「友達と一緒にすること」を教師が援助することで見られた育ちである。そのような援助から「楽しさ」や「達成感」が生まれ、幼児の意欲的・主体的な姿に結び付いている。

また、この2つのエピソードでは特に、「真似をする」ということも重要なファクターになっている。楽しそうだったり、自分ができない技ができたりする姿に憧れ、真似することで「はつらつ」の姿が見られた。教師自らがモデルとなったり、友達の姿を紹介したりすることも効果的な援助になるということである。

- ・ 一方、教師がかかわり過ぎないことも重要である。エピソード『せーのっ!!』、『リレーしよう!?!』で見られた姿は、敢えて教師が手伝わないことでみられた「はつらつ」の姿である。幼児が自分たちで準備したり遊んだりできるように環境構成を行うことは、間接的な教師の援助である。そのような援助で幼児の主体的な姿を引き出していくことが「楽しさ」や「達成感」につながり、どの幼児も積極的に体を動かして遊ぶ姿につながっていく。
- ・ 意識的、無意識的な育ちがある、という発見も成果の1つである。エピソード『登れんかったけど登れたよ!①②』で見られたH男の姿は、それまで登れなかった高いところに登れるようになった、という「はつらつ」の育ちであるが、その動機の種類が異なる。意識的な育ちでは、「できない」→「できるようになりたい」→「できた!」と達成感を強く味わっているのに対し、無意識的な育ちでは、「楽しさ」を強く味わう中で「はつらつ」の育ちを見ることができた。この両者は優劣をつけるものではないが、この視点における「目指す幼児の姿」を踏まえれば、意識的な育ちが主に年長で、無意識的な育ちが特に年少で見られるかどうか、教師の実践を振り返る指標となった。

○ 視点②「あんぜん」にかかわる育ち

- ・ この視点にかかわるエピソードを抽出したとき、まず気付いたことが「▲教師の援助」、「※環境構成」が極端に少ないことである。なぜならば、これらの援助はずっと以前に（例えば園児の入園当初やその道具や遊具を使い始めるときに）行われていたことであり、「あんぜん」の育ちの姿が見られたそのときには、幼児が既に“安全についての構え”の基本を身に付けていたからである。抽出したエピソードは、『ジャンプするよ〜!』を除けばその基本を幼児が自分（或いは自分たち）で応用・発展させたものばかりで、最初の段階での安全についての約束ごとや指導（ハザードの撤去）がいかに重要かということが分かった。
- ・ そのような指導や安全についての約束ごとが守れるようになってきたら、幼児（たち）に任せることも重要である。『凧揚げでの姿』、『こっちで見とうけん大丈夫よ!』を始め、多くのエピソードで教師が“見守る”という援助を行っている。「はつらつ」の育ちでも挙げたが、教師が干渉し過ぎないことで、幼児が自分（たち）で安全に遊ぶようになっていく。
- ・ ときにはリスクを体験させることも必要である。エピソード『ジャンプするよ〜!』で見られるような遊びの中でのリスクの体験は、スリルにも似た楽しさや恐怖を乗り越えた達成感を味わ

うことができる。そのような体験の積み重ねが経験となり、『ここは大丈夫やもん』で見られるような、どこまでが安全でどこから危険なのか自分なりに判断する姿につながる。前もってハザードの撤去を教師が行っておくことが大前提であるが、「危ないよ！」と最初からやめさせてしまうと、このような体験→経験の機会を奪ってしまうことになる。

(2) 指導計画の見直し

「研究の内容」(p.4)で触れたように、これらを行うことで、幼児の「はつらつ」・「あんぜん」の姿へつながる教師の援助がより具体的になった。また、幼児の姿の紹介として研究内容を具体的に保護者へ発信することで、家庭との連携が進んだ。

指導計画を見直すことで、今までは教師の勘に頼って実践していた体を動かしての遊びが体系的に展開されるようになり、各期にふさわしい遊びが分かりやすくなった。

(3) 固定遊具と可動遊具への着目・固定環境マップの作成

「研究の内容」(p.5)で紹介したように、固定遊具や可動遊具を使って遊ぶとき、幼児の意識的にも無意識的にも「はつらつ」・「あんぜん」の姿が多く見られた。特に、固定遊具に可動遊具を組み合わせる遊びをするとき、遊ぶ幼児の数が増え、遊びが盛り上がり、深まり、長時間継続した。同時に、2つの視点にかかわる幼児の姿も多様になった。

固定環境マップの作成では、84の「幼児の基本的動作」を基準とすることで、多くの動作が固定環境にかかわって遊ぶ中で身に付いているということが鮮明になった。園内の固定環境だけでも、84種類中54種類の基本動作が見られ、60%以上を占める。また、基本動作に挙げられていない、“ゆらす・ゆれる”・“(足で)はさみおとす”など、新しい動きも見付かった。さらにリスクやハザードを記載したことで、幼児が体験できること、前もって教師がやっておくべきことの住み分けがなされた。

2 課題

以上のような成果を上げてきた本園の研究であるが、まだ経過途中であり、課題もある。

- 「研究の内容」の(5)幼児のけがの状況集計(p.5)は、まとまったデータが取れておらず、今研究を行うことで、幼児が“安全に楽しく”遊んでいるかの数値データに乏しい。
- 「あんぜん」の育ちの中でも、意識的に安全に気を付ける幼児と、無意識的に気を付ける幼児が見られた。同様の活動や遊びを繰り返すことで意識的→無意識的となり、その方が高次の姿であると考えられるが、そのような幼児の姿があまり抽出されておらず、明確でない。
- 指導計画に記載した体を動かしての遊びの中には、それを行う時期について教師間で意見の分かれるものもあり(短縄遊びなど)、専門的な情報を集めるとともに、本園の幼児にふさわしい時期を探っている。
- 固定環境マップに記載した「ハザード」は、その固定環境固有のものを紹介したに過ぎない。その除去を目的とした場合、他の固定環境にも共通するハザードを含め、項目を網羅した安全点検専用のリストを作成する必要がある。
- 情報発信をして、研究内容を保護者に紹介してきたところであるが、家庭での「はつらつ」・「あんぜん」の育ちはどのようになっているのか、家庭でもできることはないか、連携の余地がまだある。また、本研究で培った育ちが、小学校ではどのように成長するのか追跡調査したり、地域での安全指導につなげたりなど、連携を広げていく必要がある。